中学校特殊学級における知的障害児に対する余暇指導

——教師の意向と保護者の要望との比較を通して——

関　戸　英　紀*

Teaching Leisure to Children with Intellectual Developmental Disabilities in Special Classes of Junior High Schools : Comparison between Teachers' Intention and Parents' Expectation

Hidenori SEKIDO

Ⅰ．はじめに

障害児・者が同年齢の人たちと同等の権利をもち、同様の生活ができるように生活条件・生活環境条件を整えようというノーマライゼーション（normalization ）の考え方や一人の人間の生活全体、生涯にわたっての真の豊かさを求めようというＱＯＬ（quality of life）の考え方が、わが国でも広まりつつある。それにともない、知的障害児・者の地域社会での暮らしや個人の生活をより快適なものにすることが重要な課題となってきており、それに対して様々な取り組みがなされてきている。

知的障害児・者の生活をより快適なものにするための一つの取り組みとして、余暇の活用・充実があげられる。余暇の活用・充実は、情緒の安定や体力の回復など毎日の生活を精神的・身体的に潤すことができ、欠くことのできないものである。また、学校教育においても、2002年度には学校週５日制実施の方針が打ち出されており、今後よりいっそう余暇の活用・充実が求められてこよう。

知的障害者を対象にした余暇の利用に関する実態調査では、知的障害者は、平日・休日ともに家庭内で一人で、あるいは家族とテレビ・ビデオ等を見て過ごすことが多く、友達とのつながりが少ないこと、習いごとやサークルへの参加経験や社会教育施設の利用がきわめて少ないことが報告されており（渡辺，1983[8]；野畠・浦田・高山，1987[3]）、この傾向は知的障害児を対象とした調査でも大差がない（菅田・原田，1990[6]；里見・小宮，1994[4]）。また、知的障害者の生活実態調査においても、健康面では特に問題はないが、他の家族以上にテレビ・ＣＤ・ビデオ等の視聴に陥り、受け身的に目的性が低いまま時間を消

* 障害児教育講座（Dept. of Special Education）

費している実態が指摘されている（竹内・千葉・中島・辻・加藤，1990[7]；武蔵・高畑，1996[2]）。しかし、これらの調査は卒業生を対象に行ったものが多く、在校生を対象に行った調査は少ない。しかも、対象者が在籍している、あるいは卒業した学校は養護学校である場合が大半であり、中学校特殊学級だけを対象とした調査はほとんど見当たらない。

一方、上記の実態を踏まえて、余暇の活用・充実には学校教育が重要な役割を担っていることを指摘している研究はみられるが（渡辺，1983[8]；菅田・原田，1990[6]）、学校で行われている余暇指導の実態について調査した研究は、宮川・高山（1993[1]）を除いて他には見当たらない。なお本研究において、「余暇指導」とは、学校の休み時間や家庭での自由時間・休日などにおける活動を、児童・生徒自身が考え、選択、実行していけるように支援する何らかの指導を指す。

宮川・高山（1993[1]）は、中学校特殊学級の担任に対して余暇指導に関する実態調査を行った結果、余暇指導を行っている特殊学級が半数以上あり、また卒業後のレクリェーション活動や将来趣味をもてることを目指して指導を行っていることを明らかにした。一方、知的障害児の余暇指導について考える際には、指導者の意向ばかりでなく、保護者の意向や地域社会での利用可能な社会資源等を考慮にいれながら、一人ひとりに合った余暇の過ごし方を探っていくことが必要となってくる。しかし、学校で行われている「余暇指導」に対して、保護者がどのような意見や要望をもっているかについては、これまでのところ明らかにされていない。

そこで、本研究では、知的障害特殊学級（および情緒障害特殊学級）を設置している中学校の特殊学級担任とその学級に在籍している生徒の保護者を対象に余暇指導に関する調査を行い、その結果から①特殊学級に在籍する生徒が家庭で余暇をどのように過ごしているか、②特殊学級担任が余暇指導に関してどのような意向をもっているか、③保護者は学校での余暇指導に対してどのような意識や要望をもっているか、について検討することを目的とする。

II. 方　法

1．調査の対象

横浜市立の中学校の中で知的障害特殊学級（および情緒障害特殊学級）を設置している学校96校の特殊学級担任と、そこに在籍している生徒の保護者を対象とした。

2．調査の内容

調査用紙は、宮川・高山（1993[1]）を参考にしながら、教師用と保護者用の２種類を作成した。調査内容として、教師用は、余暇指導の現状、教師が望む生徒の余暇の過ごし方、今後の余暇指導の予定であり、家庭用は、家庭での生徒の余暇の過ごし方の現状、保護者が望む生徒の余暇の過ごし方、学校での余暇指導に対する要望であった。

3．実施方法

1997年11月末から12月中旬までの期間に、各学校に調査用紙を郵送し、回答の後郵送で

回収した。保護者には学校を通じて調査を依頼し、教師用の調査用紙とともに回収した。回収数は、教師用63（回収率65.6%）、保護者用210（回答があった学校に在籍する生徒数326人，回収率64.6%）であった。回答があった学校63校にはすべて知的障害特殊学級が設置されており、そのうち21校に情緒障害特殊学級が併設されていた。両学級に在籍している生徒数の内訳は、知的障害学級212人、情緒障害学級114人であった。保護者用の回答は、男子生徒の保護者140人、女子生徒の保護者70人からあった。63校に在籍している生徒数が、男子214人、女子112人であり、ともにほぼ２：１の割合であるので、対象校全体の傾向を反映していると考えられる。

４．調査結果の分析

知的障害特殊学級・情緒障害特殊学級別、および男・女別に分けないで、教師用・保護者用ごとに分析し、比較・検討した。

III. 結　果

１．教師用の調査結果

１）現在の余暇指導に関する状況

（１）学級での余暇指導の有無（設問１）

学級で余暇指導を意識して「行っている」かどうかをたずねた。結果を図１に示す。

余暇指導を「行っている」と66.7%（42校）の学級が回答していた。３校に２校が余暇指導を行っていると言える。

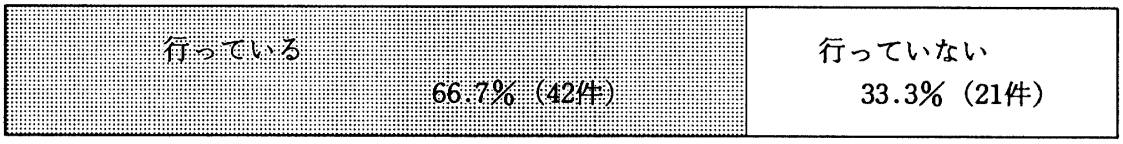

図１　余暇指導の有無　（63校について）

（２）余暇指導を行っている理由（設問２）

設問１で余暇指導を「行っている」と答えた学級に、行っている理由を複数回答可でたずねた。結果を図２に示す。

「豊かな趣味をもてるように」、「有意義に休み時間を過ごせるように」がそれぞれ57.1%であり、５割を超えた学級が回答していた。次いで、「友達と関われるように」、「将来の社会自立へ向けて」がそれぞれ47.6%、「自ら考えて行動できるように」が40.5%と４割を超えていたが、「休み時間に暇を持て余しているから」は１割に満たない回答であった。

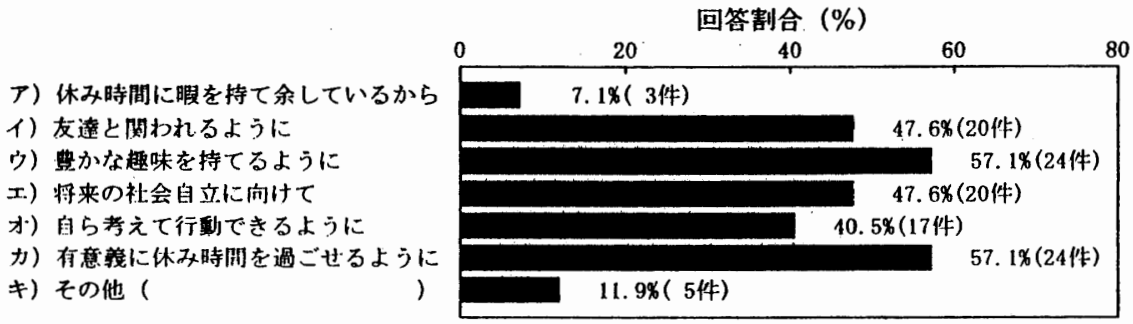

図２　余暇指導を行っている理由　（複数回答　42校について）

（３）余暇指導を行っていない理由（設問３）

設問１で余暇指導を「行っていない」と答えた学級に、行っていない理由を複数回答可でたずねた。結果を図３に示す。

「すでに生徒が余暇を楽しんでいるため」が52.4%で５割を超えていた。次に、20ポイント以上下回って、「余暇指導をする余裕がない」、「余暇指導は家庭の問題だから」がそれぞれ28.6%で続き、「余暇は個人の問題だから」、「どのように取り組めばよいのかわからない」は２割に満たなかった。

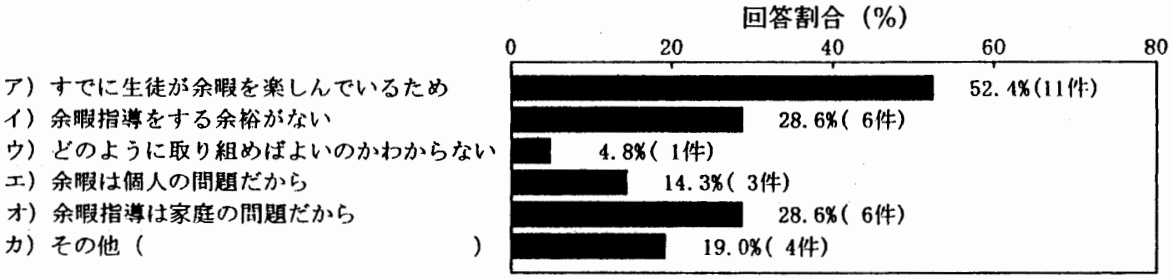

図３　余暇指導を行っていない理由（複数回答　21校について）

２）教師が生徒に望む余暇の過ごし方

教師が生徒に望む余暇の過ごし方について、複数回答可でたずねた。

（４）だれと（設問４）

結果を図４に示す。「友達と」が90.5%でもっとも高く、次いで「家族と」が68.3%で続き、「一人で」、「親と」は３割台であった。

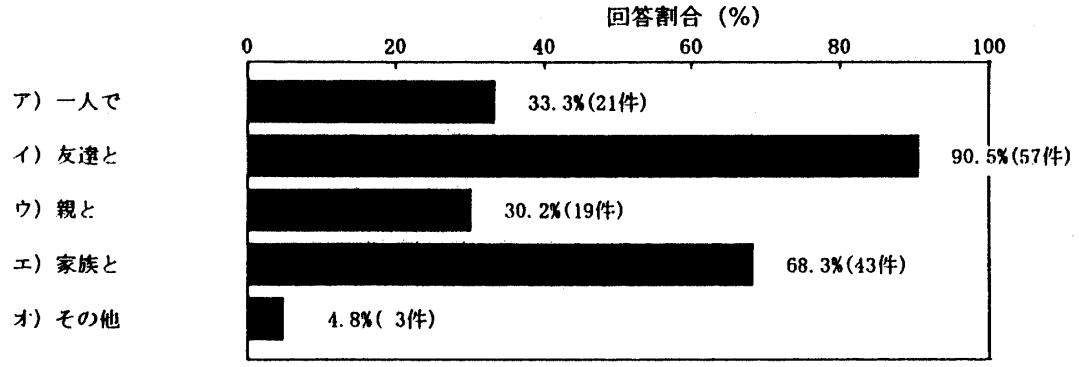

図4　過ごしてほしい人（複数回答　63校について）

（5）どこで（設問5）

結果を図5に示す。「公共施設（図書館など）で」が79.0%、「近所で」が71.0%、「家の中で」が62.9%で6割を超え、「遠方（電車で移動するくらい）で」が5割に満たなかった。

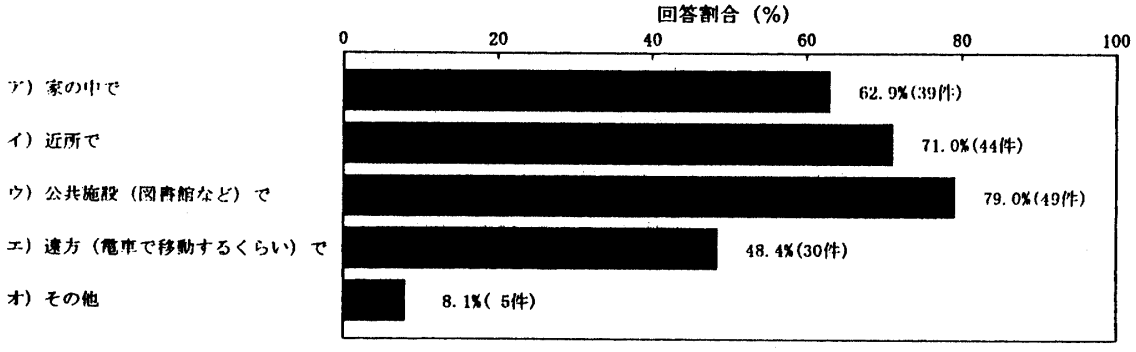

図5　過ごしてほしい場所（複数回答　62校について）

（6）なにをして（設問6）

結果を図6に示す。「工作・手芸など趣味的なもの」が71.4%でもっとも高く、以下「家事・手伝い」、「スポーツ」、「様々なことを体験する」、「自由時間の使い方を自分で考えて行動する」、「買い物」までが5割を超えて回答されていた。逆に、「休養・何もしない」、「おもちゃ遊び」、「勉強」が2割に満たなかった。

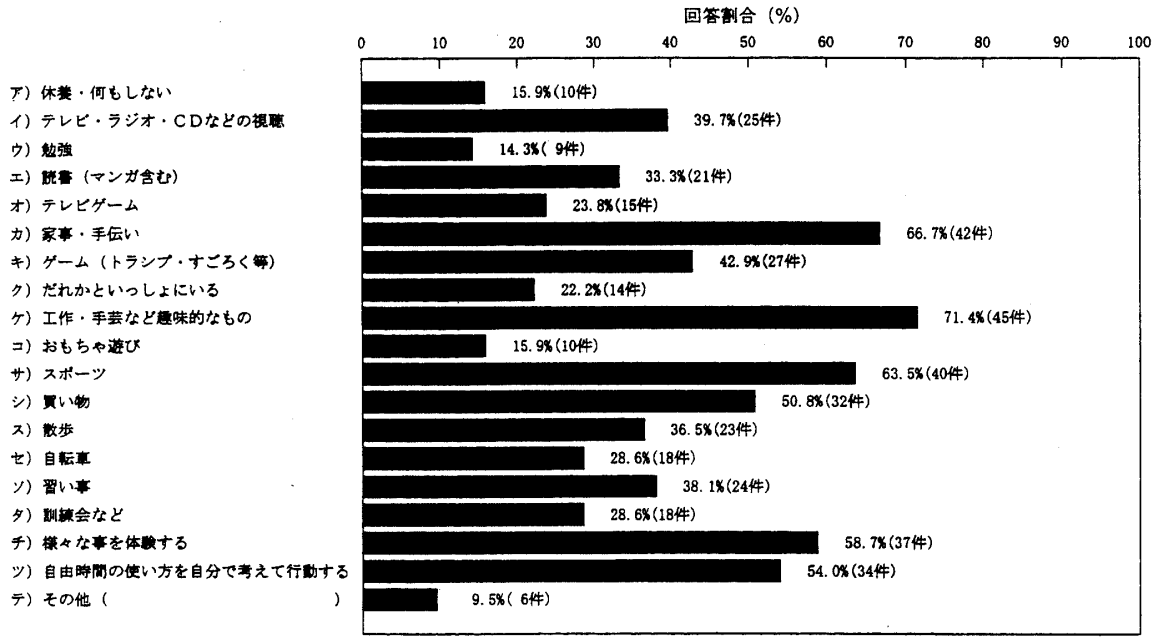

図6　過ごしてほしい内容　（複数回答　63校について）

以上のことから、教師は生徒に、「友達」や「家族」と一緒に、「公共施設」や「家の中」や家の「近所」で、「趣味的なもの」や「スポーツ」や「家事・手伝い」などを行ったり、「様々なことを体験」したりして余暇を過ごしてほしいと願っていることが分かる。

3）今後の余暇指導の予定

（7）今後の余暇指導を進める意思の有無（設問7）

今後余暇指導を進める意思があるかどうかをたずねた。結果を図7に示す。

「進める」が77.0%で、4校に3校以上が余暇指導に積極的に取り組む姿勢を示している。「わからない」は19.7%、「進めない」は3.3 %であった。

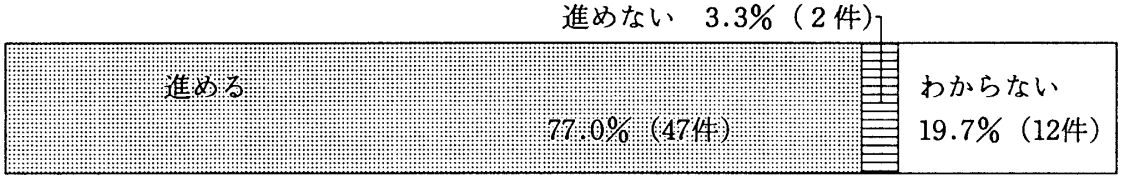

図7　余暇指導の予定　（61校について）

（8）予定している余暇指導の内容（設問8）

設問7で「進める」と回答した学級に、行おうと考えている余暇指導の内容を複数回答可でたずねた。結果を図8に示す。

「手芸・調理・音楽鑑賞など趣味的なもの」が79.2%、「スポーツ」が68.8%、「友達と

遊ぶ」が62.5％と６割を超えていた。その後、「ゲーム」、「公共施設・交通機関などの利用の仕方」、「自分がしたいことを選択し、実行すること」、「買い物」と続き、すべての項目で５割を超えていた。

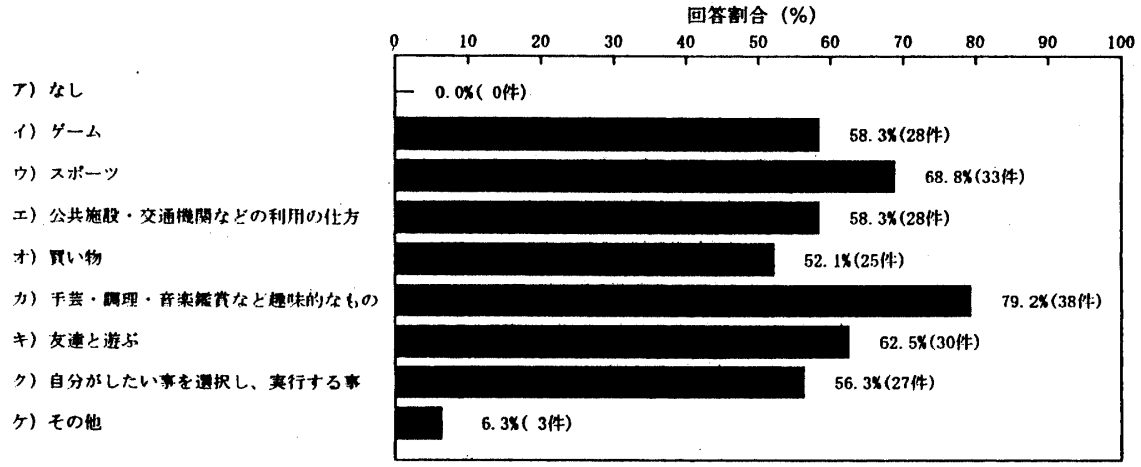

図８　行いたい内容　（複数回答　48校について）

２．保護者用の調査結果

１）家庭での生徒の余暇の過ごし方の現状

家庭での主な生徒の余暇の過ごし方について、複数回答可でたずねた。調査項目は、教師用の設問４・５・６と同様である。

（１）だれと（設問１）

結果を図９に示す。「一人で」が41.3％、「家族と」が39.9％、続いて「親と」が36.2％、「友達と」が15.5％であった。「一人で」あるいは「親を含めた家族と」一緒に過ごしていることが分かる。

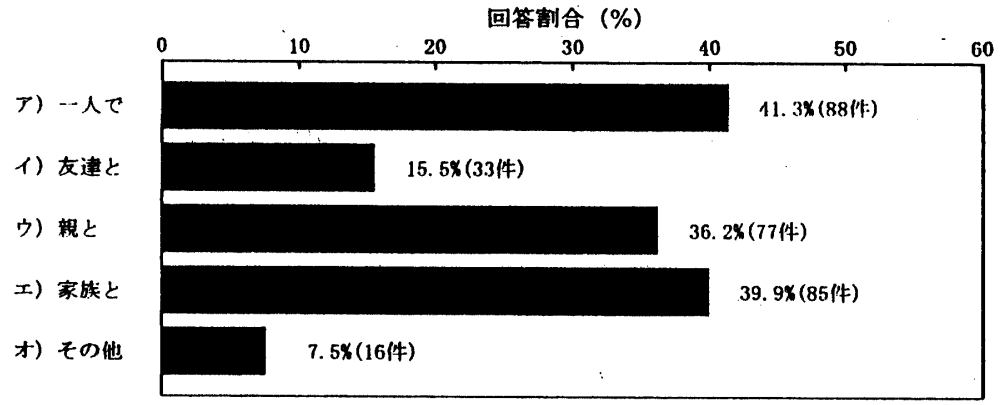

図９　過ごしている人　（複数回答　213人について）

（2）どこで（設問2）

結果を図10に示す。「家の中で」が84.4%でもっとも回答が集中した。次に、「近所で」が21.8%と続き、「遠方（電車で移動するくらい）で」、「公共施設（図書館など）で」は2割に満たなかった。

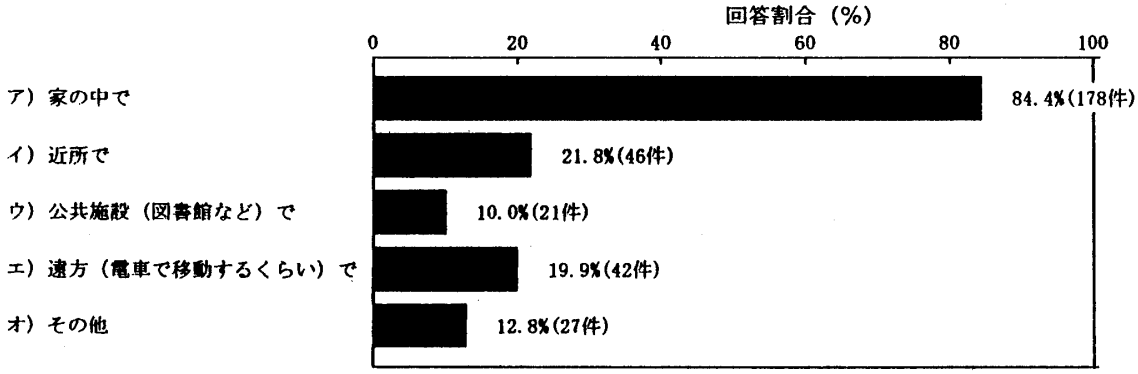

図10　過ごしている場所　（複数回答　211人について）

（3）なにをして（設問3）

結果を図11に示す。もっとも多い回答が「テレビ・ラジオ・CDの視聴」で76.5%であった。次いで、「テレビゲーム」が30ポイント下回って46.5%、「買い物」が42.7%、「家事・手伝い」が39.0%、「読書（マンガ含む）」が33.8%であった。逆に、10%に満たなかったものとして、「工作・手芸など趣味的なもの」、「訓練会など」、「様々なことを体験する」、「自由時間の使い方を自分で考えて行動する」があった。「その他」には、『普段は家や近所で過ごしているが、休日・長い休みには旅行や外出をする』との回答が5名よりあった。

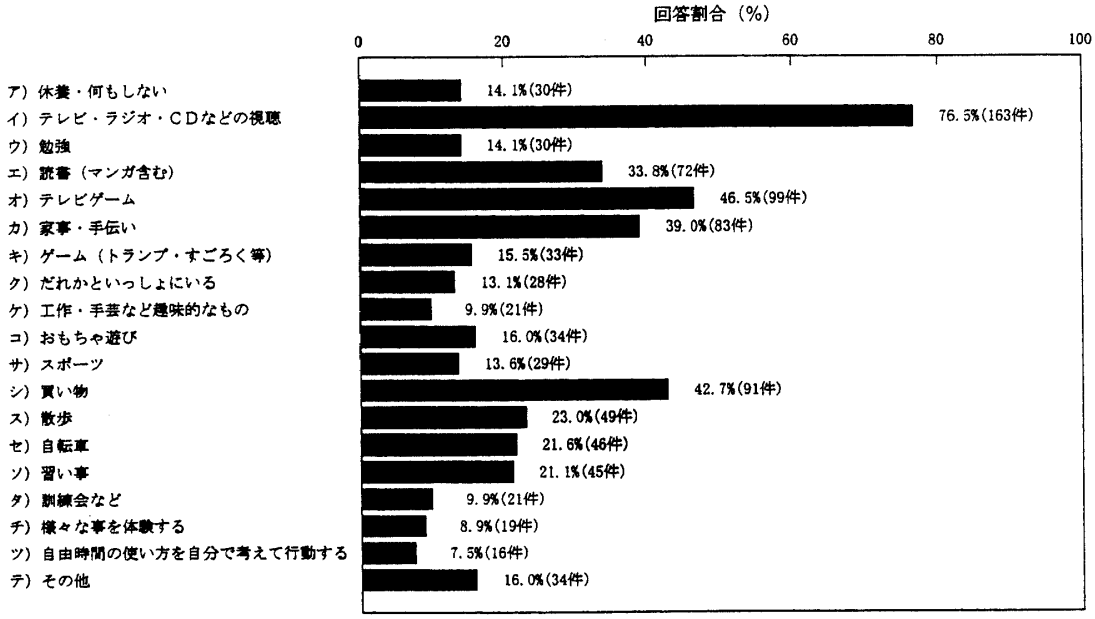

図11　過ごしている内容　（複数回答　213人について）

以上のことから、家庭で生徒は、主として「一人」で、あるいは「親を含めた家族」と一緒に、「家の中」で、「テレビ・ラジオ・CDの視聴」をして余暇を過ごしていると言える。

2）保護者が生徒に望む余暇の過ごし方

保護者が生徒に望む余暇の過ごし方について、複数回答可でたずねた。調査項目は、保護者用の設問1・2・3と同様である。

（4）だれと（設問4）

結果を図12に示す。「友達と」が71.4%でもっとも高かった。次に、50ポイント以上下回って「家族と」が17.7%、「一人で」が11.8%と続き、「親と」は1割に満たなかった。設問1と比べ、「友達と」は50ポイント以上増加している。

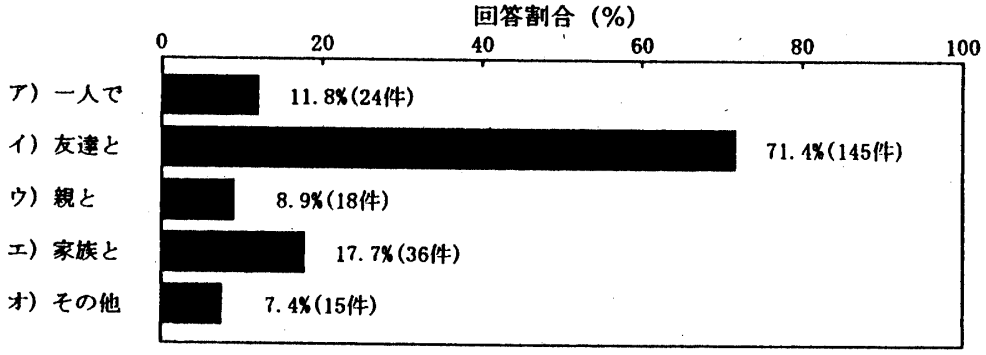

図12　過ごしてほしい人　（複数回答　203人について）

（5）どこで（設問5）

結果を図13に示す。「近所で」が49.7%でほぼ半数が回答し、「公共施設（図書館など）で」が23.9%、「家の中で」が22.8%と続いた。「遠方（電車で移動するくらい）で」は2割に満たなかった。設問2と比べ、「家の中で」は約60ポイント減少している。

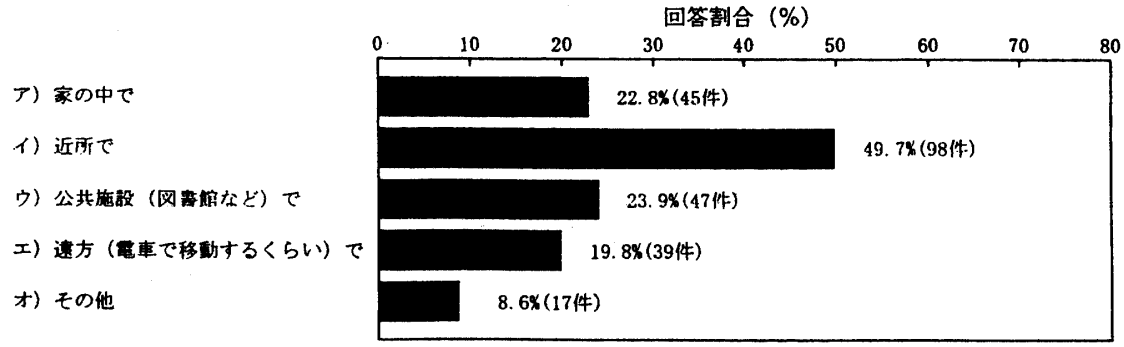

図13　過ごしてほしい場所　（複数回答　197人について）

（6）なにをして（設問6）

結果を図14に示す。「様々なことを体験する」が46.1%、「スポーツ」が44.6%、15ポイント以上下回って、「家事・手伝い」、「自由時間の使い方を自分で考えて行動する」、「買い物」、「テレビ・ラジオ・CDなどの視聴」が続いた。逆に、1割に満たなかったものとして、「自転車」、「習いごと」、「テレビゲーム」、「休養・何もしない」、「訓練会など」、「おもちゃ遊び」があげられる。なお、設問3と比べると、「テレビ・ラジオ・CDなどの視聴」が50ポイント以上、「テレビゲーム」が約40ポイント減少し、反対に「スポーツ」、「様々なことを体験する」が30ポイント以上増加している。

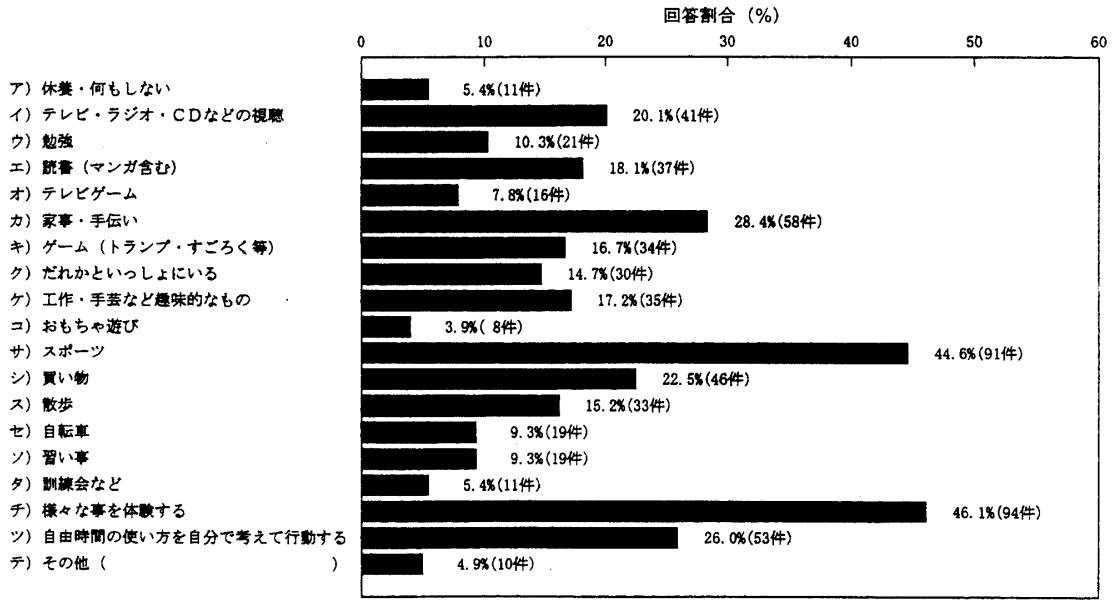

図14　過ごしてほしい内容　（複数回答　204人について）

以上のことから、保護者は生徒に、「友達」と家の「近所」で、「スポーツ」を楽しんだり、「様々なことを体験」したりして余暇を過ごしてほしいと願っていることがわかる。

3）学校での余暇指導に対する要望

保護者に、学校で余暇指導を行ってほしいかどうかについてたずねた。

（7）学校での余暇指導の希望の有無（設問7）

結果を図15に示す。「行ってほしい」が77.4%、「行う必要はない」が21.0%、「行ってほしくない」が1.6 %であった。学校での余暇指導に消極的な「行う必要はない」、「行ってほしくない」と回答した保護者に理由をたずねたところ、「（人に言われてでなく）自分で考えて行動してほしいから（回答数6，以下同様）」、「余暇は家庭で考える問題だから（5）」をあげており、「『指導』の語がもつ教え込みの印象から必要はない（5）」と答えた保護者もいた。

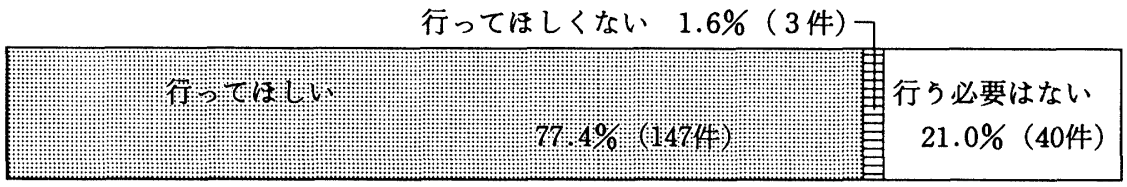

図15　余暇指導の希望の有無　（190人について）

（8）学校に望む余暇指導の内容（設問8）

学校で行ってほしい余暇指導の内容について、設問7で「行ってほしい」と回答した保護者に複数回答可でたずねた。設問7では無回答であった保護者からも回答があった。なお、調査項目は教師用の設問8に準じている。結果を図16に示す。

「スポーツ」がもっとも高く、43.8%であった。次いで、「ともだちと遊ぶ」、「自分がしたいことを選択し、実行すること」がそれぞれ37.9%、「公共施設・交通機関などの利用の仕方」が34.6%であり、それらより10ポイント以上下回って、「ゲーム（すごろく・クイズなど）」、「手芸・調理・音楽鑑賞など趣味的なもの」、「買い物」が続いた。

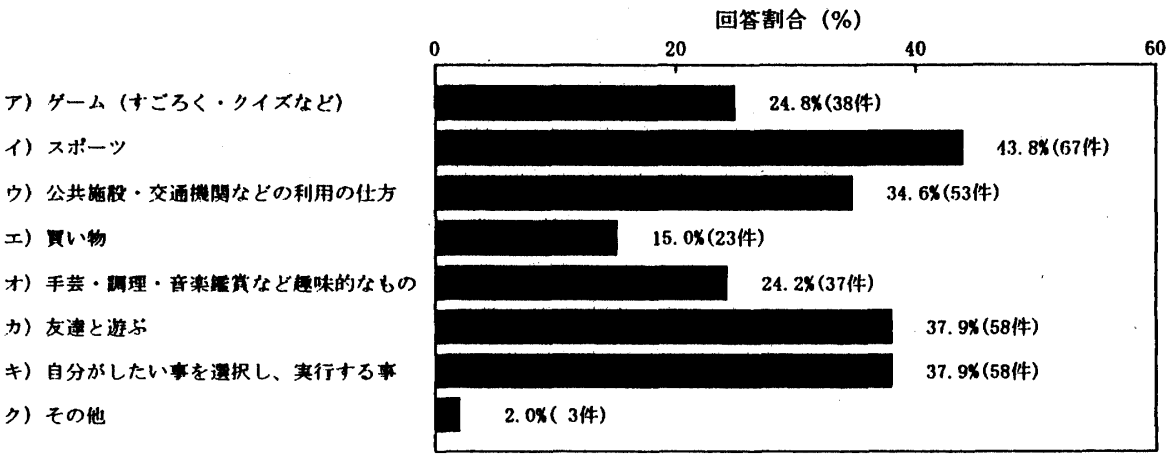

図16　行ってほしい内容　（複数回答　155人について）

V. 考　察

1．特殊学級に在籍する生徒の家庭での余暇の過ごし方

特殊学級に在籍する生徒は、「一人」で、あるいは「親を含めた家族」と一緒に、「家の中」で、「テレビ・ラジオ・CDの視聴」をして余暇を過ごしていることが明らかになった。この結果は、先行研究の結果と一致する（渡辺，1983[8]；野畠ら，1987[3]；菅田・原田，1990[6]；里見・小宮，1994[4]）。

それでは、健常児は余暇をどのように過ごしているのであろうか。平成7年に行われた横浜市の調査（1996[9]）によれば、中学生は放課後を、「友達（63.1%）」と、あるいは

「自分一人（52.2%）」で、「テレビ・ビデオを見」たり（78.2%）、「マンガや雑誌を読」んだり（73.4%）、「音楽を聞」いたり（65.8%）、あるいは「家でゆっくり休養し」たり（65.8%）して過ごしている。また、同じく平成7年に行われた総務庁の調査（1997[5]）でも、生徒は休日を、「学校の友達（60.2%）」と、「テレビを見たり、音楽を聞」いたり（64.0%）、「マンガや本を読」んだり（46.9%）して過ごしている。すなわち、健常児は、友達とあるいは一人で、テレビ・ビデオ・音楽を視聴したり、マンガ・雑誌を読んだりして余暇を過ごしていると言える。

そこで、本研究の結果と横浜市の調査結果（1996[9]）とを比較してみると、一人で、家の中で、テレビ・ラジオ・音楽を視聴して余暇を過ごしている点では、両者は共通している。しかし、一人で余暇を過ごす場合を除けば、前者は親を含めた家族と一緒に過ごすことが多いが、後者は友達と過ごすことが多い。また、「休養」は、前者では14.1%と低いが、後者では65.8%と高い割合を占めている。さらに、前者に特徴的なこととして、「家事・手伝い」が、「テレビ・ラジオ・CDなどの視聴」、「テレビゲーム」、「買い物」に次いで第4位（39.0%）を占めている。これらのことから、知的障害児は、友達とかかわったり、休養したりしない分、家族とともに家事・手伝いをしているとも考えられよう。

2．余暇指導に対する特殊学級担任と保護者の意識

意識して「余暇指導を行っている」と答えた学級が、回答した学級の66.7%を占めたことから、3校に2校が余暇指導を行っていると言える。1992年に、本研究と同様に、横浜市内の中学校特殊学級の担任に対して、余暇指導に関する実態調査を行った宮川・高山（1993[1]）の結果では、「余暇指導を行っている」と回答した学級は、全回答学級の51.9%であった。すなわち、この5年間で、「余暇指導を行っている」学級が約15ポイント増加したと言えよう。

余暇指導を行っていない理由をみると、半数以上の学級が「生徒がすでに余暇を楽しんでいるため」と答えている。「余暇は個人の問題だから」、「余暇指導は家庭の問題だから」を加えれば、学校で余暇指導を扱う必要がないと考えていることが、余暇指導を行っていない理由と言えよう。一方、余暇指導を行っている理由をみると、半数以上が「豊かな趣味をもてるように」、「有意義に休み時間を過ごせるように」と答えている。これとは逆に「休み時間に暇を持て余しているから」は、7.1 %と低い。この差異から、自由な時間があるから何かをしていればよいというのではなく、「豊か」で、「有意義」な時間の過ごし方をしてほしいという教師の願いが読み取れる。余暇指導を行うかどうかは、生徒の実態と教師の余暇のとらえ方によると考えられよう。

しかし、今後余暇指導を進める意思があるかどうかをたずねたところ、「進める」が77.0%で、4校に3校以上が余暇指導に積極的に取り組む姿勢を示している。また、この結果は、現在余暇指導を行っていると答えた学級の割合よりも10ポイント以上上回っている。学校週5日制実施を4年後に控え、教師間でも余暇指導の重要性が認識され出したと考えられよう。

これに対して、学校で余暇指導を「行ってほしい」と回答した保護者は、77.4%であり、4人中3人が余暇指導を希望していると言える。また、この割合は今後余暇指導を進めよ

うとしている学級の割合と一致する。しかしながら、「自分で考えて行動してほしい」、「余暇は家庭で考える問題」、「『指導』の語がもつ教え込みの印象から（好ましくない）」という理由から、余暇指導を「行う必要はない」、「行ってほしくない」と考えている保護者が、およそ4人に1人いるという結果も看過できない。言うまでもなく、余暇指導は学校教育の中だけで完結するものではない。それゆえに、その実施に際しては、保護者の意向を十分にくみ、保護者と共通理解をもって指導にあたることが肝要であると言えよう。

3．教師と保護者が望む余暇の過ごし方と予定（期待）される余暇指導の内容

教師が生徒に望む余暇の過ごし方は、「友達」や「家族」と一緒に、「公共施設」や「家の中」や家の「近所」で、「趣味的なもの」や「スポーツ」や「家事・手伝い」などを行ったり、「様々なことを体験」したりすることであった。また、教師が予定している余暇指導の内容は、「手芸・調理・音楽鑑賞など趣味的なもの」、「スポーツ」、「友達と遊ぶ」、「ゲーム」、「公共施設・交通機関などの利用の仕方」、「自分がしたいことを選択し、実行すること」、「買い物」の順であり、すべての項目で5割を超えていた。

一方、保護者が生徒に望む余暇の過ごし方は、「友達」と家の「近所」で、「スポーツ」を楽しんだり、「様々なことを体験」したりすることであった。また、学校に望む余暇指導の内容は、「スポーツ」がもっとも高く、43.8%であった。次いで、「ともだちと遊ぶ」、「自分がしたいことを選択し、実行すること」がそれぞれ37.9%、「公共施設・交通機関などの利用の仕方」が34.6%であり、それらより10ポイント以上下回って、「ゲーム（すごろく・クイズなど）」、「手芸・調理・音楽鑑賞など趣味的なもの」、「買い物」が続いた。

教師と保護者の生徒に望む余暇の過ごし方を比較すると、「友達」と家の「近所」で、「スポーツ」を楽しんだり、「様々なことを体験」したりすることでは、両者は一致している。また、教師が予定している余暇指導の内容と保護者が学校に望む余暇指導の内容においても「スポーツ」、「友達と遊ぶ」が両者において上位を占めている。しかしながら、生徒に望む余暇の過ごし方において、教師は、「家族（68.3%）」と一緒に、「公共施設（79.0%）」や「家の中（62.9%）」で、「趣味的なもの（71.4%）」や「家事・手伝い（66.7%）」を行うこともあげている。一方、保護者は、「家族（17.7%）」と、「公共施設（23.9%）」や「家の中（22.8%）」で、「趣味的なもの（17.2%）」や「家事・手伝い（28.4%）」を行うことを、教師ほど望んではいない。すなわち、生徒に望む余暇の過ごし方において、一面では教師と保護者との間に齟齬がみられると言えよう。またこの齟齬は、予定している余暇指導の内容と学校に望む余暇指導の内容にもみられ、教師は「手芸・調理・音楽鑑賞など趣味的なもの（79.2%）」を指導内容の第1位にあげているが、保護者はそれを6位（24.2%）にあげているにすぎない。

知的障害児の教育においては、学校で学習したことや習得したスキルが、日常の生活場面に般化していくことがもっとも重要なことである。そのためには、教師と保護者が指導課題に対して共通の理解をもち、同一の方法で子どもに対応していくことが望まれる。それにもかかわらず、どうしてこのような齟齬が生じるのであろうか。教師が、生徒の家庭での余暇の過ごし方の実態を十分に把握していないからであろうか。生徒の住む地域社会において利用可能な社会資源としてどのようなものがあるかというエコロジカル

(ecological) なアセスメントがなされていないからであろうか。あるいは、指導内容を選択するにあたって、教師が保護者と話し合いをもち、保護者の意向を反映していないからであろうか。この点に関しては、今後さらなる調査を詳細に行っていく必要がある。さらに、生徒自身がどのように余暇を過ごしたいと考えているかを可能な範囲で調査し、その意向を指導内容を選択する際に考慮していくことも今後求められてこよう。

前述したように、余暇指導は学校教育の中だけで完結するものではなく、保護者の意向や生徒本人の希望も十分に取り入れながら、適切なアセスメントのもとに、個別に計画・実践・評価されていく必要がある。

注：本論文は、筆者の指導のもとで内田純子が収集した資料を基に作成した。

文　献

1）宮川純彦・高山佳子（1993）中学校特殊学級における障害児の余暇指導に関する研究．横浜国立大学教育紀要，33，1－15.

2）武蔵博文・高畑庄藏（1996）知的障害者の地域生活実態調査（1）．日本特殊教育学会第34回大会発表論文集，912－913.

3）野畠　悟・浦田東作・高山隆一（1987）卒業生の動向と生活実態．発達の遅れと教育，日本文化科学社，354，48－57.

4）里見達也・小宮三弥（1994）精神遅滞児の学校週5日制に伴う土曜休日の過ごし方について．日本特殊教育学会第32回大会発表論文集，286－287.

5）総務庁青少年対策本部編（1997）日本の青少年の生活と意識．83－88，305－306.

6）菅田洋一郎・原田哲次（1990）精神発達遅滞児・者の余暇活動の実態と、社会教育と連帯する学校教育のあり方について．日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，194－195.

7）竹内裕幸・千葉雅子・中島康明・辻　行雄・加藤典男（1990）精薄養護学校卒業生の生活実態調査（Ⅰ）．日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，728－729.

8）渡辺　徹（1983）精神遅滞者の余暇．宮城教育大学紀要，18（2），131－143.

9）横浜市教育委員会（1996）横浜市子ども基本調査報告書．45，201－204.